楽しみへの関わりなら私にも

藤野：昨年、フォーマル（公的な支援制度）とインフォーマル（制度を使わない支援）の連携可能性を探るために、久留米 AU-formal 実行委員会（以下、AU）のメンバーで5件の個別支援に携わりました。行政の支援もある中で、「成人式に出よう」「カラオケ大会をしよう」みたいな、ワクワクを生み出すことが私たちの担当でした。走り回ったし動き回ったけど、大変というより楽しかったです。

高橋：私は企業の立場で参加しました。課題を解決することなら専門の知識が必要。でも楽しみの方なら何かできそうだなと、何も分からないまま藤野さんと一緒に個別支援の現場に行ったのが最初でした。

企業活動では見えていないことがたくさんあり、そういう地域の中で事業をしていることを認識することが大事だと感じたし、企業側にもできることがあるとわかりました。

藤野：本人の意識も変化したし、私たちも感動したり、信頼できる仲間ができたりして、とても良かった。

一人の幸せがみんなの幸せにつながるのを見て、「叶え〝あう〟だよね」と一人のメンバーが言ったことから「叶え合う支援」という言葉が生まれてきた気がします。

制度の限界に対する一つの答え

淵上：市役所の窓口に相談に来た人に合致する制度がないとお帰り頂くしかない。そんな時、なんのために市職員になったのか分からなくなっていました。「叶え合う支援」は、そこに対する答えが見つかるのではないか、制度では対応できなかったことに対応できるのではないかと希望を持っています。

和泉：行政としてとか、担当課としてだけの関わりではなく、自分も一生活者。そう思うと目の前の人にどう関わりたいのか、という思いが自然と沸き起こるようになるのかな。

永田：今は地域福祉のあり方、考え方を変えていかなければいけない時。AUの皆さんの話や実践がとても勉強になります。

松石：昔、支援は「処遇」や「指導」と言っていました。そこから「援助」に変わり「支援」という言葉に。これからは「叶え合う支援」がスタンダードになっていくのかもしれないと感じます。誰もが福祉に関わる時代。これこそAIにはできない新しい福祉だと思いますね。

安心、信頼。「幸せって何」

畠中：「お金がなくなった時、お茶碗とお箸を持って行ったら、ご飯食べさせてくれる？」と聞くと「喜んで食べさせる」と即答してくれる関係性がここにはある。お金やメリットではなく、何が起きても大丈夫という安心感、信頼は何にも代えがたいですよ。支援も同じですね。

中村：正直、もうやめたいとか、関わりたくないとか、何のためにしているのかわからなくなることもある。けれど、「社会のための礎をつくりなさい」と祖母と約束したことを思い出して、何の礎が必要なのか自分の頭で考え動くと決めています。

人と関わるのは正直面倒。でも、面倒なことが増えるほど人って幸せになれるし、笑顔が増えると感じます。やっぱり自分のためですね。

面倒なことの向こう側に

事業を担う「個」の集合体 久留米 AU-formal 実行委員会

多様な市民活動団体で活動する個人が集まり実行委員会を結成。今年度から15の活動団体がネットワークに加わりました。一昨年に同実行委員会が「叶え合う支援」を提案し、実装に向けた基盤整備に取り組んできました。その素地を生かして、今年度から参加支援事業を担います。

AU-formal
Project
Instagram